

「今夜、エジプトに行きます」とツバメは言いました。ツバメはその予定にじょうきげんでした。町中の名所をみなおとずれてから、教会のとうのてっぺんに長い時間とまっていました。ツバメが行くところはどこでもスズメがチュンチュン鳴いていて、「すてきな旅人ね」と口々に言っていましたので、ツバメはとてもうれしくなりました。月がのぼると、ツバメは幸福の王子のところにもどってきました。「エジプトに何かことづけはありますか」と声をあげました。「もうすぐ出発しますから」「ツバメさん、ツバメさん、小さなツバメさん」と王子は言いました。「もう一ばんとまってくれませんか」「わたくしはエジプトに行きたいと思っています」とツバメは答えました。「明日ぼくの友だちは川を上り、二番目のたきへ飛んでいくでしょう。そこではパピルスのしげみの間でカバが休んでいます。そしてきょ大なみかげ石のぎょくざにはメムノン神がすわっているんです。メムノン神は、星を一ばん中見つめ続け、明けのみょうじょうがかがやくと喜びの声を一声あげ、そしてまた、ちんもくにもどると言われています。正午には黄色のライオンが水辺に

水を飲みにやってきます。ライオンの目は緑の石のよう
うで、その声はたきのごうごうという音よりも大きい
んですよ」「ツバメさん、ツバメさん、小さなツバメ
さん」と王子は言いました。「ずっと向こう、町の反
対側にある屋根うら部屋にわか者のすがたが見える」